

「食道・胃静脈瘤の病態と治療」

藤田保健衛生大学名誉教授 青木 春夫 編集
大分医科大学副学長 小林 迪夫

新潟大学学長

武 藤 輝 一

このたび、「食道・胃静脈瘤の病態と治療」と題する待望の書が上梓の運びとなった。編集者は、現在わが国でこの分野の臨床と研究の両面において第一人者と言われる青木春夫、小林迪夫の両先生であり、執筆者を含め、この分野のエキスパートを網羅し 60 名に及んでいる。そして執筆者が編集者の“新しい概念に基づき、最新の現場について記述してもらう”という方針に沿いながら、限られた紙面の中で精一杯記述しているのが特徴と言える。

周知のごとく門脈圧亢進症の概念は、Whipple の考え方に局所門脈系の hyperdynamic state の知見が加わって、現在では理解しやすいものとなった。本書では、この概念を基礎に、大きく 2 つに分けて記述されている。前半は“門脈圧亢進症、食道・胃静脈瘤の病態生理”である。第 1 章の循環異常の病態生理では門脈領域の循環異常が中心に記述されているが、全身、肝、脾、消化管壁などの循環異常についても述べられている。第 2、第 3 章ではそれぞれ胃病変および基礎的疾患の特徴につ

いて述べられている。後半では、前半での病態生理からみでの“食道・胃静脈瘤に対する治療”が記述されている。ここでは食道・胃静脈瘤の内視鏡所見(第 1 章)の記述があった後、主として食道および噴門部の静脈瘤に対する各種の外科的治療と非観血的治療の実際(第 2 章)について詳しく述べられ、この後の各章で胃穹窿部の孤立性静脈瘤、各種治療の予後と再発、胃病変の治療法の選択基準などが記載されている。

本書を理解しやすくしているのは、所々にみられる one point advice と from editor と書かれた但し書きである。前者は読者に特に留意してもらうために、後者は編集者の意見を付記し、より読者がわかりやすいようにと工夫したものである。編集者の心憎いばかりの配慮がうかがわれ、本書が並いる他のテキストと一線を画しているゆえンである。巻末の門脈圧亢進症の概念、病態に関する研究の歴史と治療の歴史は便利であるし、診断・治療の手引、指針としての厚生省研究班の研究報告書の表も有用である。

私は学生時代に Whipple の概念を知り、講師時代に門脈圧亢進症の各論講義を担当する中で今永一先生の分類を利用させていただいた。教授在職時代は門脈圧亢進症の研究は研究グループに一任したが、手術では私も執刀した。本書を通読させていただき、自らの過去の知識と経験を懐しむと共に認識を新たにした次第である。

本書は消化器病学を専攻するベテランの内科医、外科医にとって門脈圧亢進症に関する新知識を導入し、自らの知識、技量を整理するうえで大変便利なものと思う。また消化器病学を学ぼうとする若い内科医、外科医が門脈圧亢進症とそれによる食道・胃静脈瘤の治療法を十分に理解し、実施するために役だつものと感じている。消化器疾患の診断と治療に携わる医師に必読の書として推薦する次第である。

● B5 頁 320 図 182 写真 82
原色図 66 表 62 1996 定価
27,810 円(税込) ㊞400

医学書院 刊 (㊞ 03-3817-5657)